

熊野川を語る会 議事骨子

開催日時	平成 18 年 1 月 14 日 (土) 14:00 ~ 16:30		
開催場所	新宮地域職業訓練センター 大教室		
出席者	担当委員	中島委員 (代表)	江頭委員 (進行役) 清岡委員
	同席委員	浦木委員、椎葉委員、高須委員、瀧野委員、津田委員、橋本委員、古田委員、山本委員、吉野委員	
	意見発表者	赤嶋恵子氏、楠本弘児氏、角孝志氏、田中旬子氏、尾屋勲氏 (以上新宮市)	

「熊野川を語る会」を開催し、新宮市 (熊野川町を除く) を代表する方々による熊野川との係りや地域の自然、歴史・文化、産業、地域振興策等についての意見発表、代表者および傍聴者との意見交換を行った。議事骨子は以下のようである。

1. 熊野川懇談会について

- ・ これまでの河川法の改正の流れ、熊野川懇談会の設立の主旨について説明が行われた。

2. 熊野川を語る会の主旨について

- ・ 熊野川流域で「語る会」が開催されるに至った経緯、懇談会の考え方について説明が行われた。

3. 自己紹介・意見交換

<主な意見>

(1) 地元代表者による意見発表

- ・ 平成 16 年に熊野川は唯一の川の参詣道として世界遺産に登録された。熊野川の良さを知ってもらうため、新宮市等の支援により、昨年 9 月より熊野川町の道の駅から新宮の速玉大社前の川原までの区間で川舟下りが実施されている。川舟下りでは熊野川のすばらしい景観、歴史、自然環境を体験できたと多くの人々から喜んでいただいている。一方で、河道の変化が著しく船頭には高い操船技術が必要である。12 月から 3 月までは運休だが、すでに多くの予約が入っている。川舟下りから見た熊野川の現状に対する問題点としては、水量不足、洪水後の川岸のゴミ、川岸の道路の白いガードレール等が挙げられる。今後の課題としては、川舟下りを様々な観光に結びつけること等がある。川舟下りに関連して権現川原の川原屋や新宮城の復元等も考えられる。今後も熊野川の良さを PR していきたい。【赤嶋氏】
- ・ 写真家として 1 年の内約 200 日は熊野周辺の山々に入っており、その際に感じた山地の危機的な状況についてお話したい。現在熊野の山においては、山が荒れ、山腹崩壊で土石流が発生し、土砂や流木が熊野川へ入っている。このため、大雨発生後、熊野川は濁流が長期化し、ひどい時には 2 週間余り濁流が継続する。熊野の山の約 70% が植林であり、その大部分を占める民有地の手入れがなされていない。このため、熊野古道の沿線においても、大部分の区間が暗く荒れた状況になっている。このような場所では下草が生えていないため根がむき出しになった箇所が多く、土砂流出や保水力の低下の原因になっている。これらの状況は戦後の植林政策のためスギ、ヒノキが密植され、その後の外材輸入により山村が疲弊し、その結果として山の手入れがなされなくなったためである。ガス、水道等の普及により、これまで依存してきた「後の山」を放置するようになった結果として、山が荒れ、獣害、花粉症が増加し、山村の暮らしが難しくなり、最後には山村の生活・文化の崩壊に繋がってゆくのではないかと。今後の課題としては「森の再生」が重要であり、下草が繁茂し山肌が見えない状況の森「複層林」を再生することが急務である。【楠本氏】
- ・ 新宮市では、明治 22 年の大水害、昭和 34 年の伊勢湾台風、昭和 57 年の台風 10 号など、過去に多くの洪水被害を受けてきた。特に昭和 57 年の台風 10 号においては、熊野川からの逆流により市内 1000 戸以上で浸水するなどの被害が発生し、これを契機として市田川河口に水門および排水機場が整備されている。熊野川は全国の 1 級水系 109 水系の内 26 番目の流域面積であるが、流域は多雨地域で急峻な地形を呈しており、計画高水流量が最大で「日本一の暴れ川」と言える。熊野川の計画高水流量は伊勢湾台風時の実績流量を基準に定められたと聞いているが、それ以降も度々洪水が発生し、平成 9 年の洪水では、ほぼ計画高水流量の洪水が流れるなど、計画高水流量をいつ超えてもおかしくない状況にある。また近年は、流域の山林の荒廃が進んだ状況にあり、安全側にたった計画流量を定めていただきたい。【角氏】
- ・ 新宮市で EM 菌 (有用微生物群) が持つ浄化作用を活用して、市田川の浄化を進めている。近年熊野川から市田川に浄化用水が導水されているが、生活雑排水は相変わらず全て市田川に流れ込んでおり、汚染が進んだ状況にある。このような川に対して 2000 年の 1 月から 2005 年 1 月まで毎月 1 トンの EM 菌の投入を継続した。一時は市田川にホタルやカワセミが見られるまでになったが、会として継続するのが困難になり、昨年 1 月からは規模を縮小し毎月 0.2m³ 程度の投入を行っている。このため水質はもとの汚い川に戻りつつあるようである。新宮市においては、財政的にも下水道整備は困難であり、市田川を浄化するためには EM 菌の投入が最適なのではないか。毎月 3 ~ 4 m³ の EM 菌を投入できればかなりの効果が発揮できると思われる。また別な話になるが、熊野川沿いの国道 168 号のコンクリート壁について、熊野に自生する植物を活用した植栽を行い、景観を良くしてもらいたい。【田中氏】
- ・ 20 年前に U ターンで新宮市に戻り、農業をやりながら木工を始めた。今は間伐材を利用した学習機の製作等を行っている。

さらに3年前からはネイチャースクールを開設し、田植え等の農業体験、間伐等の林業体験の他、沢登り、カヌーの体験を行っている。昨年は、県の支援を得て、農家民泊施設として新宮市の高田の山中にキャンプ用のデッキを整備した。間伐については、山登りで、真暗でクサも生えていない山林を見せると、お客の皆さんも山がおかしいと感じる人が多く、何とかしようということで体験を行うようになった。またこの夏からは熊野川をゴム製のカヌーで下るカヌー体験も始めた。特にカヌーはエンジン付きのボートとは異なり音が小さく鳥などを身近に観察できるので、皆さん感激して帰っていただいている。ただ、熊野川においては、発電所からドロ水が流れており、遠くから来ていただいてもドロ川ではなさない。ぜひ何とかしていただきたい。【尾屋氏】

(2) 意見交換

- ・ 密植した森林ではダメなのか。どうすれば下草の生えた森が維持できるのか。(椎葉委員)
密植した森林がダメなのではなく、そのまま放置されたのが問題である。(楠本氏)
戦後から始まった効率面重視のスギなどの単一種の植栽には問題がある。戦前は多様な樹種が山林を形成しており、材木だけでない多様な林産物を産み出していた。自然に近づければ手入れしなくてもよい森が育つ。ゆっくりではあるが多様な山作りを心がけている。多面的な取り組みができるような山づくりが必要である。(浦木委員)
- ・ 今後の河川環境を維持するための活動は民間レベルでは続けられないのか。(吉野委員)
可能であると考えられるが、PR、勧誘不足等のため続けられなかった。ただし、浄化事業については、市が下水道を作らずに民間に任すのは間違い。年間500万円くらいで出来るので市が導入するべきである。(田中氏)
- ・ 川船下り、体験事業等について今後の観光面での展開や条件整備についてはどうか。また、流域の環境整備をどのように考えればよいか。(橋本委員)
川舟下りは補助金支援を得て行っているが今のところ赤字である。問題点としては交通アクセスが悪いこと、山の法面、ガードレールの色が熊野川の景観を損ねており残念である。(赤嶋氏)
農林業体験については、他でもやっており熊野まで来てする必要はない。熊野古道ウォークと川舟下りなど、複数のメニューを組み合わせることが望ましい。また、営業に出るのが難しいので、行政や大学の支援があればありがたい。(尾屋氏)
- ・ 治水対策や森の問題などについては、我々と河川管理者の宿題としてきちんとしたデータに基づいて議論したい。(江頭委員長)
- ・ 地域に生息している樹木を用いたコンクリート護岸の景観改善策を、現在地和歌山県が検討している。(瀧野委員)
- ・ 市田川の水質改善にはどのようなものが必要なのか。(椎葉委員)
浄化には毎月3~4m3のEM菌が必要となり、人件費も合わせると年間500万円くらいが必要である。(田中氏)
- ・ 新宮市が上流地域と一緒に熊野川のために一緒に事業を行う等の動きはないのか。(吉野委員)
行政と連携し、補助事業を活用しながら、山林の再生を進めることは可能ではないか。(楠本氏)
行政の組織として熊野川流域対策連合会、水質協といった組織があり、様々な活動が行われている。(角氏)
- ・ 市民レベルでの流域連携の可能性はあるのか、また具体的な動きはあるのか。(橋本委員)
「山は海の恋人」というが、熊野川においては、山側と海側の連携はほとんどない。(角氏)
間伐等の作業は非常に危険を伴うためボランティアが取り組む場合には、安全面に注意する必要がある。(楠本氏)
- ・ 熊野川の河川整備では、地域振興の取り組みを盛り込む必要があるのでは。(江頭委員長)
- ・ 「世界遺産の川」は熊野川の良いPRになる。できるだけ川下り事業を発展させる必要がある。(山本委員)
- ・ 森林再生、山の適正な管理のためには、長い目でみれば問題ではあるが、助成を含めた陳情も有効である。生き物は愛情を持って育てるとうまく育つ。工業的な手法から生き物を大切にす手法へと近づくことは、熊野の自然については熊野の神様へ近づくことになる。また、熊野川の和歌山県側の景観については、ボランティア等を使って植林してはどうか。出来るだけ熊野の自然の姿に近づける様な配慮が必要である。(浦木委員)

(3) 一般傍聴者の意見聴取

- ・ 川の理念に関する意見が無く残念である。昭和30年代には「吉野熊野構想」が持ち上がり、新宮市民も期待したが、結局ダムを作っただけだった。新宮の市民には河川整備に対する不信がある。他の地域から来てもらうためにどうするかというのではなく、地元が育ててきた文明・文化をどう再生し活用するかが重要である。猿谷ダムから紀の川へ水を取られ、洪水時のみ熊野川に流されている。今の熊野川は発電のための用水路となってしまっている。自然に近い河川整備を進めていただきたい。今の熊野川は、川で泳げない川、小さなアユしかいない川、川漁師のいない川になっている。
- ・ 懇談会での討議対象範囲や今後の河川整備事業の進捗予定、計画に関する県との整合性について教えて欲しい。
- ・ 川の濁水の色は熊野川本流の上下流や支川でも異なり、白色や茶色など様々であるが、色で判断すれば最下流部の新宮が一番豊かな自然の色になっている。新宮市にもすばらしい自然が残されている。これを永く残して行きたい。
- ・ 市田川が少しでもきれいになるようにとEM菌を活用している。熊野川の最下流部である新宮では、生活面や産業面での川の利用が無い。今後、川下りと市内観光を結びつけるなど、熊野川を利用して繁栄していく方法を考えていきたい。

以上